
シャカリキ!! SHAKe A LIKIng

和風露カルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャカリキ！！ SHAKK E A LIKING

【Nコード】

N0768Q

【作者名】

和風露カルタ

【あらすじ】

どうも、和風露タカルです。

この作品に関しては『よく分からない』をコンセプトにやっていきたいとなぁ、思っています。

王道の様な設定で、でもその背景に広がっているのは『よく分からない』。そんな感じで仕上がっていれば、幸いです。

あと、三人称小説の練習を兼ねておりますので、至らない点が多々あると思います。そういう時は、ガンガンご指摘していただければありがたいです。

中から、華奢な姿をした女性が膝を

付くように現れた。いつの間にか少年の声は止んでいた。バタンと、うつ伏せに倒れた女性を見下ろし、少年は『不思議でたまらない』
というような表情をしていた。その表情もすぐに憎悪に歪んだ険相となり、右手を振り上げ振り下ろした。振り下ろされた金属棒は女性の後頭部に当たり、飛び散る濁った血液とともに鈍い音を響かせた。その音に快感を覚えたのか、少年の顔は恍惚とした表情になった。しかし、その瞳だけは憎悪に染まったままで、そのアンバランスが余計少年を不気味に見せた。

そして少年は自分の遙か後ろにもう一つの人影があることにも気付かず、何度も何度も何度も金属棒を女性の華奢な体へと振り下ろすのだった。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

やっぱり言い訳って必要な事だと思う。

何処にでも居る月並みな女性、カラノミイ唐野美衣は、上司に向かって深々と頭を下げながらそんな事を思った。

特に何か持っているわけでもない。美人では無いが、さりとして残念な顔つきでもなく、スタイルも悪くわなない。良くもないが。特技と言えば、『文章の速読』という微妙な答しか持ち合わせていない。その特技を活かし、声優を志したのも束の間であった。残念な演技力が足を引っ張り、どこの事務所にも入る事ができなかった。それでもアニメに携わりたいと心が叫んだのか、今現在、何故かアニメ

制作会社『Gキユウト』に勤めていた。

そんな彼女は、とある上司に遅刻を理由に激怒されていたのだっ
た。

「でも……」

「『でも』じゃ通じないんだよ。まだしつかりとした功績を積んで
いるならまだしも、君は本当に。どうしようも無いね。こないだだ
つて、君が原画担当を誘ったせいで期日に間に合わなかったんだよ
？ 分かってる？ そもそも……」

上司の叱咤はいつしか只の愚痴へと変わっていった。美衣はそれ
に気付いているのかわからないのか、苦虫を噛み潰したような顔で頭を
下げ続けるのであった。

美衣は出社前、いや、出社途中に横断歩道で困っている老婆に手
助けをしていたせいで出社に遅れたのだが、その旨を上司に伝える
タイミングを逃し続けていた。たとえ伝える事ができたとしても上
司がそれを真摯に受け止めるとも思えなかった。

「もういいよ、下がって。仕事始めて。ほら、早く」

上司の叱咤激励（？）も程々に終了し、美衣は自分のデスクへ
と足を向けた。椅子に腰を下したところで備え付けの電話が鳴った。
美衣が取るより早く、向かいに座る男性社員が受話器を取った。

「もしもし。はい。……、はい。……分かりました。伝えておきま
す」

時折、美衣を見やりながら電話口に向かって頭を下げる男性社員
を不審に思い、美衣はそわそわした。

「はい、……了解しました、伝えておきます。……あ、はい。では
ガチャ、と受話器を置いて、男性社員は「ミイちゃん？」と美衣
に声を掛けた。

「はい、何でしょう？」

何となく心構えができていた美衣は間髪入れずに返事をした。

「なんか、上の方がミイちゃんを呼んでるみたいなんだけど」

例の上司から見えない為なのだろうか、彼は顔を美衣に寄せて、

掌で壁を作りながらひそひそ声で美衣に話しかけた。

「田巻たまきさんにバレるとまずいらしいんだけど、何したの？ ミイちゃん」

田巻と言うのは、あの上司の名前である。

「何もしてませんって。てか、上つてどこなんですか？」

「いや、よく分からないんだよね。『死火下シカモト』とか名乗ってたけど、僕、聞いたこと無いんだよね。でも社内の様子を把握しているみたいだったし」

二人の様子を見て、ゴホンと上司が咳払いをした。

「ほら、田巻さんに勘付かれないようにね」

男性社員が、大急ぎで書いたメモ用紙を美衣に渡した。

ハイと答えて、美衣は立ち上がった。

「すみません、ちょっと御手洗いに……」

メモ用紙をポケットに収め、上司の鋭い視線を回避するように廊下に飛び出る美衣。安全な所まで歩いたところで、ポケットからメモ用紙を取り出した。殴り書きで書かれた文字の様な図形の様なよく分からない内容を美衣は理解したようで、階段へと足の向きを変えた。

目的地は五階のようで、美衣は三階にあるオフィスから二階分の階段を駆け上がった。

なんなのかな、クビにされちゃったりするのかな？

それならば上司から伝えられるのが妥当であるうが、美衣はその事に気が付かず、マイナス的なネガティブな事ばかり思考した。

タイル張りの廊下を暫く歩き、曲がるべき場所を右に曲がった。その廊下の一番奥の部屋が指定の会議室なのだが、そこに立ちほだかるように一人の男が腕を組んで壁に寄りかかっていた。

？ 誰だろう、会社の人……じゃないよね？

男は漆黒のスウェットのズボンを穿いており、上半身にはこれもまた真っ黒で無地のセーターを纏っていた。そのセーターの首元はやたら大きいタートルネックになっており、その部分が顔の下半分

を隠していた。手には黒いライダーグローブが嵌められており、足にも黒い運動用シューズが履かれていた。全身を黒でコーディネートした男は肩幅と腰の幅がとても広く、手足が長かった。その手足の長さは異常と言って相違無い程であった。

何をするでもないのに自然と蜘蛛を連想してしまう容貌をした男に、美衣は若干の恐怖を覚えた。しかし足を止める言い訳にはあまりに小さな障害であると思い、美衣はそのまま進んだ。男の横を通り過ぎようとした瞬間、幼い声が聞こえた。

《カラノミイ……だね？》

「っ！？」

自分の名前が呼ばれとつさに足を止めたが、声の音源が分からず少し戸惑う。美衣は男を横目で見やったが、さすがに彼の声ではないと、そう判断した。

《反応したって事は、やっぱり君がカラノミイなんだね。梶子さん、クチナシお願い頼むよ》

おもむろに男が壁から体を離し、美衣へと近づいた。

「へ？ 何ですか？ あなた誰ですか？」

おろおろと後退しながら男に声を掛ける美衣であったが、さすがに身の危険を感じているようで、いつでも走り出せるように準備していた。

会議室まで行ければ、何とかなるっ！

そう思い、会議室へと目を向けた美衣は愕然とした。

会議室から真っ白のスーツを着た男女が二人、手に黒い鉄の塊を携えて出てきたのだ。そして、内一人の女が口を開いた。

「なんやなんや。何かと思えば、梶子君。君やったんかあ。ウチの獲物に手え出さんでくれる？」

「関西弁！？」

全く場違いな声を上げる美衣を横に、梶子と呼ばれた蜘蛛男は女へと体を向けた。

《死火下さん本人がお出まじつても乙なもんだね。そんなに必死

だったとは思わなかったよ》

再び、どこから聞こえるのか分からない幼い声を耳にし、美衣はより混乱した。

へええ！？ どっちに行くのが良いのかな？ 普通白い方が良
い者だったりするんだけどな。……多分、どっちも駄目なんですけ
どー！

足の速さにさほど自信が無い美衣はオフィスまで走れば逃れられ
るという考え自体が思い浮かばない様子でただおろおろと視線を泳
がせる事しかできなかった。

すると、梶子は美衣を庇う様に死火下と呼ばれた女の前に立ち
はだかった。

今にも戦闘が始まりそうなピリピリとした空気の中で死火下が口
を開いた。

「やっぱ、梶子君にはヨモヤちゃんがおらんなあ。きゃはははは、
無口キャラの梶子君は一人じゃおしゃべりもできんからなあ」

死火下はそう言いながら、安全装置の外れた拳銃の銃口でこめか
みをボリボリと掻いた。その引き金には中指が掛けられたままであ
った。

変わった拳銃の持ち方するんだなあ。

死火本が手元がよく見えるポーズを取ったせいで、美衣はそんな
事を思った。

そうこうしている間に、死火下が銃をこめかみから外し美衣に向
けてた。そして、引き金を引いた。

梶子は美衣をあさつての方向に押しやり、自身は死火下に向かっ
て右へと飛びのいた。対象に当たらなかつた銃弾は、窓下にある手
すりに当たって甲高い音を響かせた。更に死火下が放った第二陣の
二発の銃弾を、梶子はキュッキュツとバスケツトボールを連想させ
るような音を響かせながら左右に大きくステップを踏む事でかわし
た。

「ちっ、やっぱ当たらんなあ。ウチの精密射撃で当たらんちゅうん

やから、そんじよそこらのもんや無いで、君い。しっかしめんどいし、ウチ諦めるわ。ほな」

そう言っただけで死火本は会議室へと戻っていった。

一人残った白づくめの男は、会議室の方向を向いて少し困った顔をしたがすぐに無表情を取り戻し、銃口を梶子に向けた。つもりだったのだが。

その時にはもう、その男の体は宙を舞っていた。

男が会議室に顔を向けている間に、梶子は男との距離を詰めており、男が銃を構える頃には豪快な突き蹴りが男の顎にヒットしていた。

普通突き蹴りと言うものは、高い位置から鳩尾みぞおちや胸、腹などに決める技なのだが、梶子は上半身を極限まで後ろに反らせ、右足を自らの頭よりも高い位置まで伸ばして、突き蹴りを完成させていた。

地面にだらしなく倒れこむ男を余所目に、梶子は会議室の扉を開いたのだが、そこにはもう、誰も居なかった。

それはそうと。

いつの間にか美衣は気絶していた。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

美衣が目覚めると、そこはワンボックスカーの後部座席であった。

「目、覚めた？」

例の幼い声が運転席から聞こえてきた。横になった状態のまま、

バックミラーを覗くと、小さい男の子の目元が見えた。少年もバックミラー越しに美衣を見て、微笑んだ。

「ぼくはヨモヤ、よろしくね」

「ヨモヤ……？」

「日本名だけどね」

何が面白かったのか、はははつとヨモヤは笑った。

美衣は動揺して助手席に目をやって、余計動揺した。

助手席からはみ出る肩、頭。後ろから見ただけ彼、梶子だと分かるシルエット。

「ひっ！」

美衣は思わず、声を上げた。それに気付き、ヨモヤは助手席を指差しながら言った。

「ああ、この人は梶子クチナシって言うんだ。これも日本名だけど」

なお怯える美衣にヨモヤは困ったように言った。

「梶子さんは君を助けてくれたんだよ？　ここまで運んできたのもこの人だし」

それがまずいんですけどー！

美衣が不安を恐怖に変換していると、梶子が顔を出し、美衣に向かって一礼した。それにより、美衣の恐怖値はまた一段上がった。

「ななな、何なんですか！？　あなた方！　私に何の用なんですか？」

美衣は体が左へ揺れて、その車が走行中だと言う事に初めて気付く。

「うん。今から説明するよ」

「ちょっと待ってください？　え？　何？　どこに向かっているんですか？　っていうか、免許持つてるんですか？」

一般的には的を得た、しかしこの場合少しずれた質問を耳にして、少年は力なく笑った。

「面白い事を言うんだね。まあいいよ。それもおいおい説明する」
また車体が大きく揺れて一旦止まってから、スピードを上げた。

高速道路に乗ったようだ。

美衣はそれに気付いたようで、あたふたした。

そんな遠くに行くの！？　っていかどうやって乗ったの！？　運転しているのが少年であるのだから、その疑問は実に妥当であった。しかし、この面々にとってはそんな事、本当に些細なことでもあった。

それじゃあ、とヨモヤが話し出した。

「まず、梶子さんの顔を見て。君の身の安心はぼくが保障する」
こんな小さな、具体的に言えば十代入りたての少年に身の安心を保障されても何の説得力も無いだろうが、美衣は何故か頷いた。

梶子が静かに後ろを向いて、美衣を正面から見つめた。そして右手で自らのネック部分に手を掛け、何の音も鳴らさずに下ろした。

人は本当に驚いた時、案外声は出ないもので、それに従い美衣も息を呑む以上の事は何もできなかった。ただ、目だけは大きく見開かれていた。

何が美衣の瞳に映ったのか。襟を下ろしたそこに一体何があったのか。梶子という男の鼻の下に何があったのか。大きく見開かれた美衣の瞳に何が映ったのか。

蜘蛛のような男、『梶子』の顔面下半分には。

何も無かった。

鼻の下の他の部分より濃い色を持った唇があるべき場所には、食道につながっていて物を食べる時に必ず必要になるその部分には、少し薄い肌色の皮膚が広がっているだけであった。

その部位だけで七十もの慣用句を作る、言わば感情を表に出す数少ない器官の一つが欠落したその顔は、『不気味』以外の何物でも無かった。

『口』が無いだけでこれまでも見た目が気持ち悪くなるのか、と美衣は心の中で思い、しかしこれを現実として受け止めているのか

どうか怪しいものだとも思った。

暫くすると梶子が、もういいだろ？ と言ったようにネック部分を戻し、勿論無言のまま前方を向いてしまった。美衣が啞然とする中、ヨモヤが可笑しそうに語りだした。

「まあ何が言いたいのかって、『今この世界は変わり始めている』って事なんだよね。表社会では何も起きていないように見えるけど、というより表では何も起こってないだけだね。裏では違う。スコットランドで『クリスタル』がとある少年に打ち砕かれて……、まあこんな話は意味無いよね」

面倒くさそうな口調ではあったが、ヨモヤ本人はとても楽しそうな顔をしていた。

「とにかくね、梶子さんみたいな、そういうよくわからない連中が現れ始めているんだよ。そして、君はさ、その中の一人なんだよ」

……………

口では勿論、頭の中でも勘善に固まっちゃってしまっていた美衣は何とか思考を保とうと頑張ってはいたが、その糸口を掴み損ねてしまっただようのだ。

「あ、へえ。そうなんですかー。分かりました。では、私はここらで……」

「ちよつと！ 今、高速道路の上だから、梶子さん！ 彼女を抑えて！」

車両のドアを開けて身を高速道路の猛風にさらす美衣の肩を梶子が身を助手席から乗り出し押さえ、なんとか車内に彼女に落ち着かせた。

「帰ります！ 放して下さいー！」

「だあああ！ もういいや。梶子さん！」

梶子はヨモヤの声に頷き、長い腕を駆使し、なお暴れる美衣の後頭部に軽く手刀を入れた。音を付けるならば『ストーン』といった所だ。美衣は一瞬白目になり、そのまま瞼を閉じつつ体を座席に投げ出した。それは勿論美衣の意志などではなく、というか、美衣は気

絶していた。

その位置（後書き）

さて。

一応連載とはなっていますが、どうなるかは僕にも分かりません

^^;

評判によっては、すぐに更新するかもですし、その逆もあり得ます。練習なのでそういう事になるのですが、あしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0768q/>

シャカリキ!! SHAKe A LIKIng

2011年11月13日11時24分発行